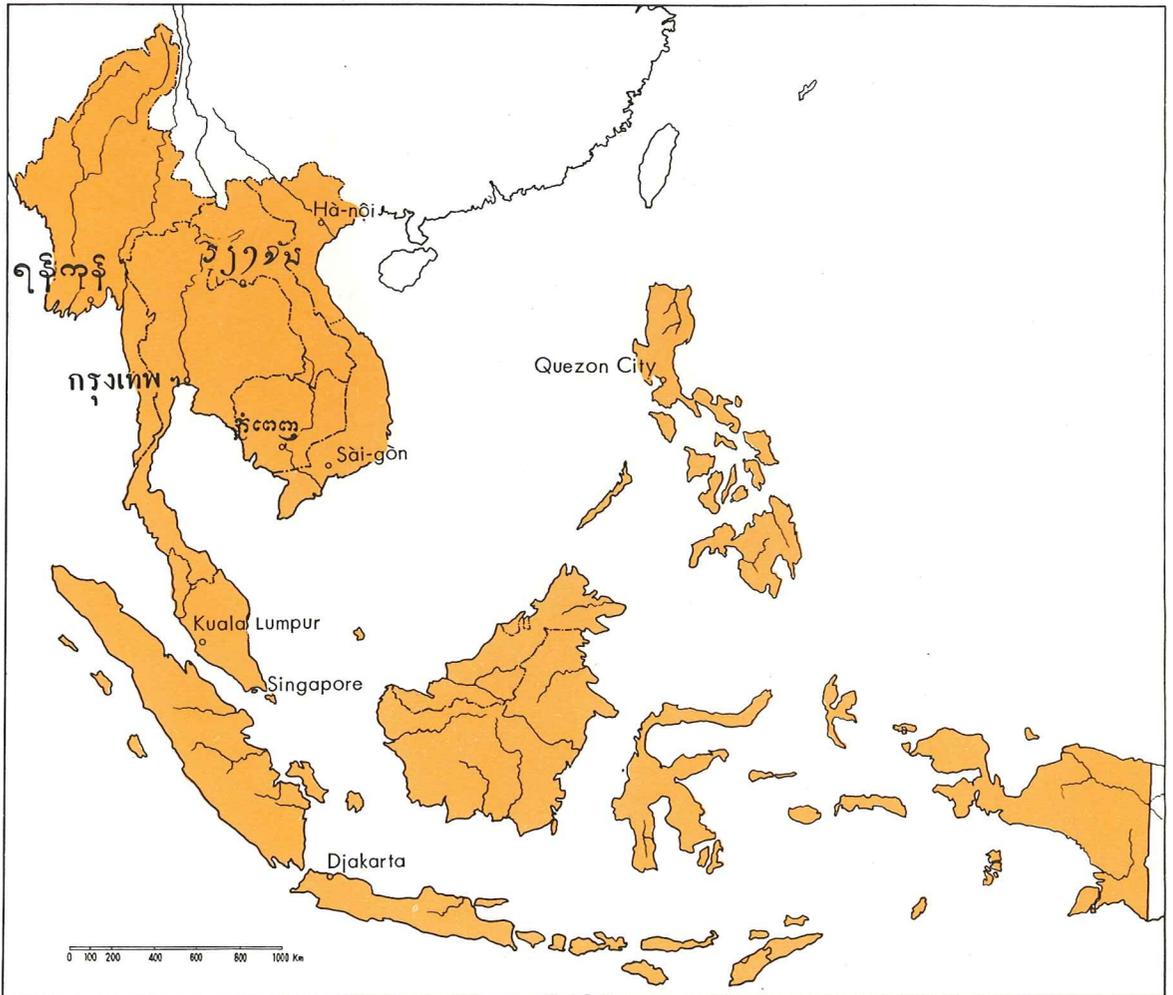


東南アジア研究
センター 所報
(Ⅲ) 1965/1966



京都大学

東南アジア地域





はじめに

京都大学東南アジア研究センター所長 岩 村 忍

京都大学東南アジア研究センターは、1963年1月に学内措置として設置され、同年4月から第1期5カ年計画の実施に着手した。これはフォード財団の35万ドルの資金援助にもとづく。翌1964年度、東南アジア研究センター後援会が組織され、約6,000万円の寄付金を関西を中心とする財界からあおぎ、自然科学部門の現地調査研究はこの年度からはじまった。1965年4月、国立学校設置法施行規則第20条の2により、「東南アジアの総合的地域研究を推進する組織」としての東南アジア研究センターが官制化され、1部門が設けられた。

東南アジア研究計画は、本年3月、第1期5カ年計画の第3年度をおわり、4月から第4年度に入る。ここに、年次報告として所報Ⅲ 1965/1966を刊行、1965年度における事業状況を報告するとともに、1966年度の事業計画を展望したい。

第3年度も、現地での調査研究活動を予定どおり進めることができた。タイにおける3カ村、マラヤにおける2カ村の現地定着調査をはじめ社会科学部門の調査はほぼ完了、自然科学部門の調査はこの年度にピークに達した。養成計画もすすみ、交流計画としては、多数の外人専門学者の来訪といくつかの講義があったほか、とくに第1回国際シンポジウム“東南アジアにおける日本の将来”、また第2回国内シンポジウム“東南アジアにおける水資源利用”は、きわめて成功的であった。図書資料整備計画として昨年6月京大付属図書館に HRAF 室を開設。出版計画の中心となる Reports on Research in Southeast Asia は Natural Science Series—1, Prof. Takashi Sato, Field Crops in Thailand の刊行をみた。Symposium Series No. 1 の Rice Culture in Malaya, 東南アジア研究双書第1巻の故棚瀬襄爾博士の遺稿「他界観念の原始形態」も出版された。

第4年度の現地調査としては社会科学部門計画の残りのほか、自然科学部門の諸計画がすすめられる。また第4～5年度には、研究成果のとりまとめとその出版に全力をそそぎ、さらに、第2期5カ年計画の立案にとりかかる。過去3カ年のフィールド・ワークをとおして社会科学と自然科学との総合的研究がいかに重要であり、またそれが方法のいかんによっては可能であることを知った。第2期計画では、とくに integrated area studies に主力をそそぎたい。

計画が順調にすすんできたことについて、内外の関係者の好意に負うところきわめて大きい。心から御礼を申しあげ、本年度においても御期待に酬いたいと覚悟を新たにすするしだいである。

1966年6月30日

1965年度事業の経過

調査研究事業

I 現地調査

東南アジア研究計画は現地における調査研究作業を主とする。これは社会科学部門と自然科学部門とにわかれ、1965年度には43人の研究者がフィールド・ワークに参加した。

A 社会科学部門

1. ビルマ・タイ地域調査

ビルマ・タイ地域調査は、1963年10月にはじまった。本岡武教授（東南ア研）は1965年10月みたびタイに赴き、タイにおける農業発展の現地調査をおえ、1966年3月帰国。この期間、とくにタイ中部平原における土地基盤条件の整備、南タイにおけるゴム再植計画について実地に調査した。

村落調査として、カレン族の文化変容を主題に研究をつづけていた飯島茂助手（東南ア研）は、1965年11月再びタイ北部に入った。昨年の山地カレンにつづいて今年はカレン族の平地民化を研究目的とし、メー・ホンソーン県メー・サリエンに昌子夫人とともに定着調査をしている。夫人を同伴して村に定着することは、研究上きわめて望ましい。飯島助手は当センターとしてはこの先鞭をつけたのであった。

水野浩一研修員（東南ア研）は、昨年度にひきつづき東北タイのコンケーン西南 20km のドーン・デーングに1965年11月再び赴き、現在、農村社会構造の変動過程を調査している。東北タイ15県の概要調査も行なった。調査村ドーン・デーングの東北タイにおける特殊性が明らかにされよう。一昨年から昨年にかけて、南部タイのソククラとハジャイの中間にある回教徒部落ドンキレクに入っていた矢野暢研修員（法学部）は、1965年11月、村民の大歓迎をうけて再び村に戻った。村落のコミュニケーションの変容を明らかにするとともに、南タイの特質をも把握し、3月、全調査を終了して帰国した。

2. マレーシア・インドネシア地域調査

マレーシア・インドネシア地域調査は、1964年6月から始められ、マラヤ西北部ケダー州の水稲単作農村アロールジャングスにおいて定着調査を行ってきた。調査班のリーダー棚瀬襄爾助教授（文学部）は、帰国後3カ月足らずの1964年12月10日心筋梗塞症のため急逝したが、調査は残った若い人々を中心に続けられた。

坪内良博研修員（文学部）は1965年6月、口羽益生助教授（竜谷大学）は7月に、マレー人村落の社会構造の調査を継続するため現地に戻った。前田清茂講師（天理大学）は、アロールジャングスにおいてひとつの集落を形成し、主として商店や精米所などを営む華僑の生活を調査するため、7月から9月までアロールジャングスのキャンプに合流。また

イスラムの影響が強いマレー人社会で男性が女性に面接調査を行なうのは困難なため、梅田輝世大学院学生（関西学院大学）が、当センターの唯一の女性調査員として、7月から8月、アロールジャングス班の活動を助けた。以上の集約的な調査をとどこおりなく終って、現地キャンプは65年10月閉鎖された。

前年度、マラヤ大学留学生としてマレーシア地域調査班の調査を助けた前田成文大学院学生（文学部）は、非イスラムマレー人集落の調査のため、65年7月から、ジョホール州エンダウ川上流のオラン・フル（ジャクン族）の部落に単身住みこみ、無事調査を終了、66年5月帰国した。

3. 東南アジアの宗教にかんする研究

前年度にタイ・ビルマ・カンボジア・南ベトナムの仏教教団の現状を調査した藤吉慈海助手（人文科学研究所）は、1965年12月から翌年1月にかけて、タイ・マレーシアを訪れ、とくにタイで時代による戒律の変化と瞑想法とについて研究した。

藤本勝次教授（関西大学文学部）は、1965年7～9月、再びマラヤで回教の現状を調査し、さらに原資料収集の必要のため、アラブ連合カイロに足をのばした。

4. 東南アジアの教育にかんする研究

タイの近代化において教育のはたす役割を課題として、森口兼二助教授（教育学部）は、1965年11月から翌年1月にかけて、タイに滞在、あわせてカンボジア・マレーシアをも調査した。栗本一男助手（教育学部）は、東南アジア諸国における教育計画の現状調査のため、フィリピン・インドネシア・タイ・マレーシアを一巡した。

5. 東南アジアの政治構造にかんする研究

東南アジア諸国とくに旧インドシナ3国の政治的近代化の現状調査のため猪木正道教授（法学部）が1965年8～9月、南ベトナム・カンボジア・ラオスを旅行し、あわせて、これら3国における現地調査の可能性について打診した。ついで神谷不二教授（大阪市立大学法学部）は東南アジア諸国における政治構造、とくに政治と軍部との関係の調査のため1966年2月からベトナム・カンボジア・タイ・マレーシア・インドネシアの諸国に赴き、調査の重点をインドネシアにおいている。

婚約式のご馳走。（マラヤ・ケダール州）



自転車で通学する中学生。
（カンボジア・シエムレアプ）



B 自然科学部門

1. 生物班

(1) タイの高等隠花植物相の調査

タイの植物相、とくに高等隠花植物相の調査のため、田川基二助教授・岩槻邦男助手（理学部）はシダ植物、北川尚史講師（奈良教育大学）はコケ植物、福岡誠行大学院学生（理学部）は顕花植物を担当、1965年11月から66年2月にかけて植物採集に従事した。収集資料は現在整理中であるが、タイの植物相解明のためのきわめて貴重な資料が収集できた。

(2) ジャワ島の森林生物相の調査

インドネシア地域の予備調査をかねて、ジャワ島の森林生物相の調査のため、吉井良三教授（教養部）が今立源太良助手（東京医科歯科大学教養部）と、1965年7月から9月にかけて、主として森林生物を収集。とくに赤道下における原生林の土壤動物の垂直分布にかんする基礎資料（最高点は3,023m）をうることに成功した。なお、このチームに、インドネシアにおける社会科学部門調査可能性の打診のため酒井敏明大学院学生（文学部）が同行した。

2. 医薬班

(1) 東南アジアにおける癩にかんする調査研究

西占貢教授（医学部）は岡田誠太郎助教授（医学部）とともに1966年1～3月の間に、タイにおいてタイ国厚生省癩対策班と共同してタイと日本における癩症状



▲ (上) *Sambucus javanica* Reinw. ex Blume. タイ国のソクス。黒い果実をつけ、赤い実のなる日本産のものとの関係は興味深い。



(下) *Arisaema* sp. テンナンショウ属の1種。世界の暖帯から熱帯に分布しているが、タイでも山地にしばしばみられる。



乾燥モンスーン林。(タイ) ▶

の差異を明らかにする研究を行なった。また、特にタイ国における患者家族の児童および健康環境の児童について、癩と結核の免疫学的関連性にかんする調査をした。

(2) タイにおける肺結核にかんする研究

寺松孝助教授（結核研究所）は、本年度もまた1965年7～8月、Nonburi 中央胸部疾患病院において、肺結核外科的疾患の調査を目的とし、手術適応例の状況と手術実施にあたっての問題を調査した。結核撲滅のためには、外科的療法が必須であり、またベッド数・薬品の整備補充・専門家不足など問題が山積していることを明らかにした。

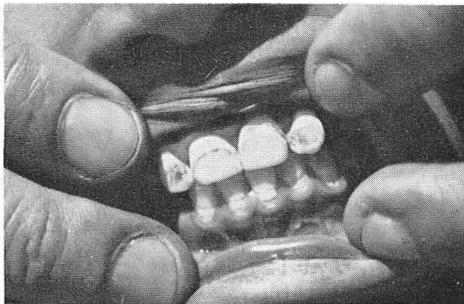
(3) タイ出血熱病原体にかんする研究

東昇教授（ウイルス研究所）は、1965年8月、バンコクにおいて、タイ出血熱病原体ウイルスの本体、とくにその増殖メカニズムを研究。ウイルスが50m μ 、六角形であり、増殖メカニズムは“budding of plasma membrane”であって、細胞外に美しいウイルス結晶をつくることを解明した。

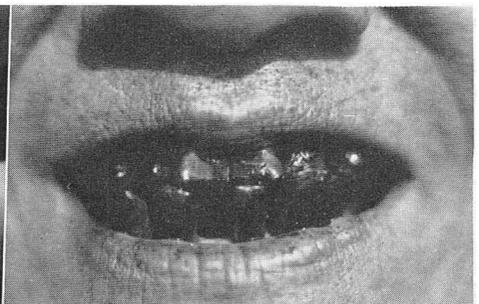
(4) タイにおける飲料水含有弗素量の調査研究

美濃口玄教授は天野義彦助手（医学部）とともに、1966年1～2月、歯牙弗素症とくに飲料水中の弗素量と現地食習慣の調査のため、タイ・カンボジアに赴き、北タイのチェンマイ付近において、弗素による歯ぐされ病を発見した。現在、もちかえった飲料水の分析をつづけている。

飲料水の中の弗素により熱帯では斑状歯がおこりやすい。（タイ）



ペテルをかんで黒くそまった歯。（タイ）



3. 地学班

(1) マラヤにおける地質と鉱床の調査

前年度の滝本清教授の予備調査のあとをうけて1966年8～9月、鈴鹿恒茂助教授と港種雄講師（工学部）は、マラヤの鉄鉱床の地質学的調査を行なった。

(2) マラヤにおける物理探鉱

同じく前年度の吉住永三郎教授の予備調査の継続として、谷口敬一郎助教授と入江恒爾講師（工学部）は、マラヤの鉄鉱床にたいする物理探鉱調査を実施した。

4. 農業生産班

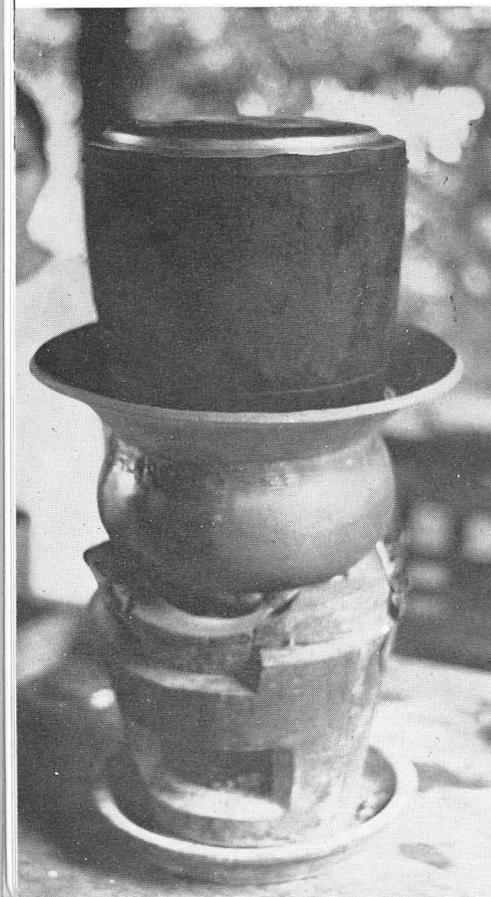
(1) 東南アジアの水田土壌にかんする研究

川口桂三郎教授（農学部）は、熱帯水田土壌調査の本年度の重点をセイロンにおいた。1965年12月から翌2月にかけて、久馬一剛助手（農学部）とともに、セイロンのほかカンボジア・フィリピンで土壌を採集した。今後の分析の結果、調査土壌の生産性を解明し、生産性向上の方途が明らかにされうる。



タイ国バンケン稲作試験場の水稲。
(多収種試験)

チーク材でつくられたモチ米のむし器。
タイ国北部の農村ではモチ米が主食。



(2) タイの水田についての植物栄養学的研究

カセツェート大学に1カ年留学した福井捷朗大学院学生(農学部)は、1965年7月から1966年1月にかけて、バンケンの農務省米穀局技術部試験場に実験室をもち、国内の代表的な水田4カ所において、窒素の天然供給力の季節的変動を研究した。

(3) 東南アジアにおける水稲栽培の比較研究

1963~1964年にかけて、タイ水稲栽培の全般的な調査を行なった渡部忠世助教授(京都府立大学)は、1965年7~12月にかけて、北タイのサンパトン米作試験場を基地とし、これまであまり研究されていないモチ品種の栽培、とくに農家における栽培の実態、代表的品種の生育習性、品質の物理的特性を調査研究した。

(4) 東南アジアの土壌微生物にかんする研究

小林達治助手(農学部)は、1965年8~9月、バンコク平原の水田中の窒素固定微生物を探究した。微生物の種類と菌数調査により、低収量と菌類との相関性を認めた。またマラヤにも赴き、Penyakit Merah という水稲の病気の発生する地方では、タンパク分解菌の多いことを明らかにした。

(5) 東南アジアにおける作物病害の研究

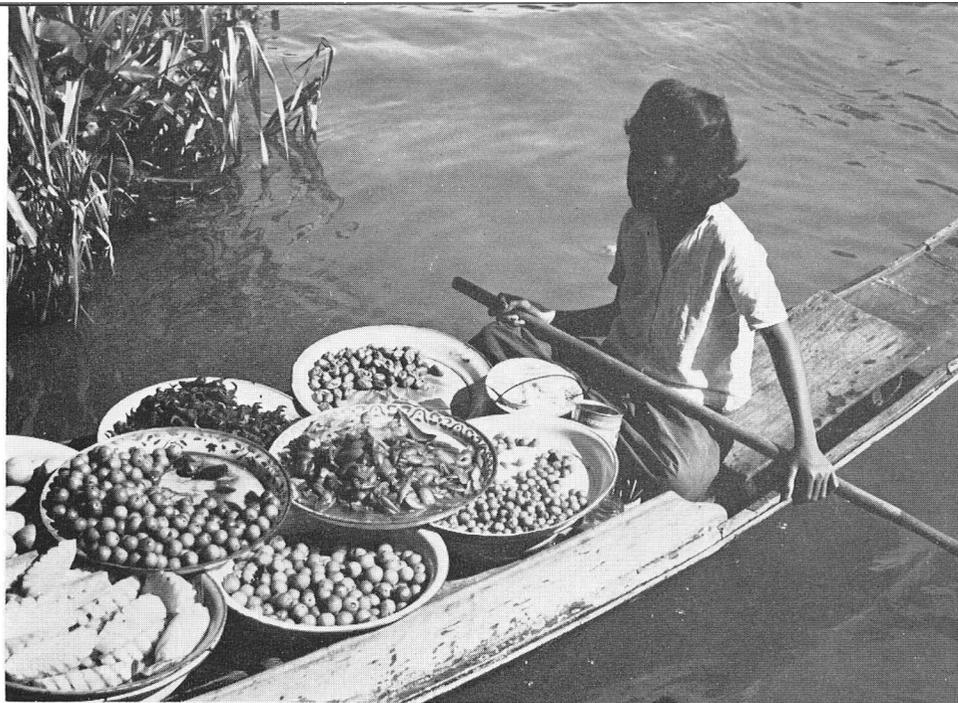
赤井重恭教授(農学部)は、1965年10~11月、タイ・マレーシア・カンボジアにおいて、水稲その他2,3の作物の病害を調査した。病害はあまり目立たないが、栽培方法が進歩すれば、いろいろな病害の発生が予測される。すでにマラヤでは穂イモチの発生、またゴム林では材質病朽菌による被害が多いことを見た。

(6) 東南アジアにおける農業水利計画および水利構造物にかんする調査研究

タイの農業水利計画の立て方ならびに水利構造物の設計にかんする調査研究のため、沢田敏男教授と南勲助教授(農学部)は、1965年8月、タイ灌漑局の援助のもとに、現地を視察し、農業水利計画と水利構造物の設計上における問題点を指摘した。

(7) 東南アジアにおける家畜の改良ならびに繁殖にかんする実情調査

西川義正教授(農学部)は、1966年1~2月、タイ・カンボジア・マラヤの畜産の実態を調査。これにもと



▲ フローティングマーケットの果物売り。(タイ)

づいて計画的な家畜改良方針を樹立することの必要を痛感した。

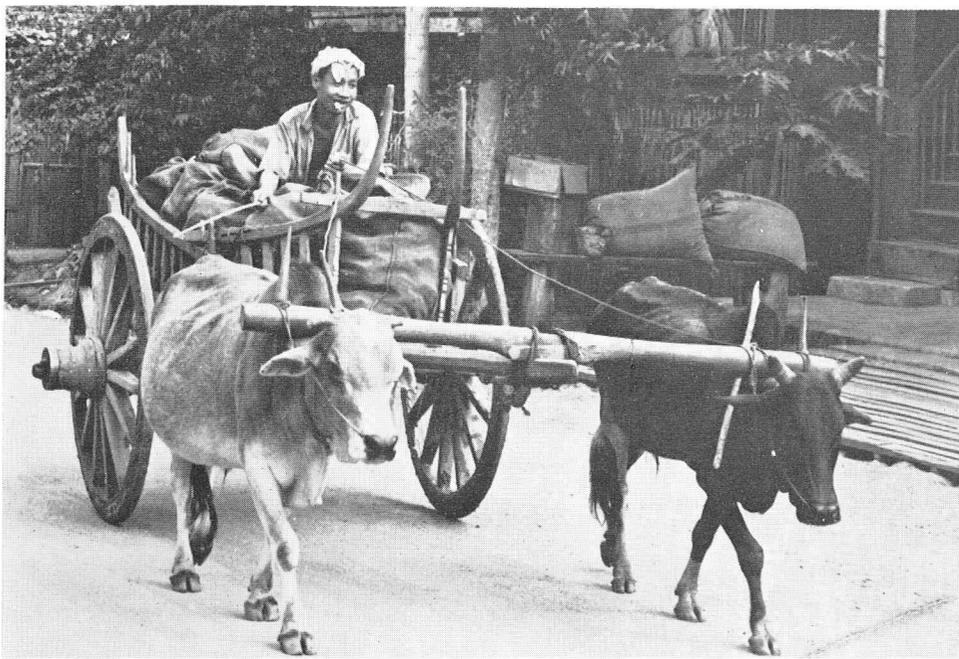
(8) 魚毒性成分含有植物の探索

Callicarpa 属植物の探索・採集のため、河津一儀助手(農学部)は1965年8月、マラヤに赴き、*Callicarpa longifolia*, *C. arborea*, *C. maingayi* を採集、現在その成分を抽出中である。

(9) 湿潤アジアと乾燥アジアとの果樹作の比較研究

小林章農学部長は1965年8月タイおよびインド・イランに赴き、湿潤および乾燥地帯における果樹作の比較調査を行ない、あわせて東南アジア研究センター管理委員長としてタイにおける東南アジアの研究活動状況を視察した。

▼ 荷物を運ぶ牛車。(タイ・メーホンソーン)



II 研究例会

現地調査を終った研究者は、当センターの研究例会で報告する。1965年度には第77回より第96回に至る計20回の研究例会が催され、1回に2～3人が報告、それにもとづく討議が行なわれた。

III 調査研究計画のための予備調査

1. 吉里邦夫文部省大学学術局大学課長は、京大東南アジア研究センターの活動状況視察のため、1965年10～11月に、タイを短期訪問した。
2. 岩村忍所長は、第2期計画の準備のため、1966年1月、タイ・カンボジア・マレーシア・インドネシア・フィリピンの諸国を歴訪、各国政府の関係機関と折衝をかさねた。
3. 同じく第2期に自然科学実験室を現地に設立する計画の検討のため、四手井綱英教授（農学部）は石井米雄助教授（東南ア研）とともに、タイ・マレーシアを訪問して関係機関と交渉。マラヤ大学との共同ラボラトリーの設立が適当であるとの結論をえた。

IV バンコク連絡事務所

バンコク連絡事務所の運営のため、1965年7～8月は寺松孝助教授、1965年10月～1966年3月は本岡武教授が責任者となり、両者の不在中は、飯島茂助手が代行した。バンコク連絡事務所は現地調査の進捗のため重要な存在である。内外の訪問者も多く、1965年11月には、中村梅吉文部大臣の訪問をえた。

養成事業

1. 留学生

前年度留学生のうち、桂満希郎（文学部大学院学生）は留学延期が認められ、チュラロンコーン大学に留学中のところ、1965年10月からタマサート大学の外務省寄贈「日本研究講座」の講師となった。また上記のように、前田成文・福井捷朗はそれぞれ現地調査に従事し、小林一三（農学部大学院学生）はコーネル大学にひきつづき在学している。

2. 奨励金受給者

本年度より、東南アジア研究のための優秀な研究者養成確保のため奨励金支給を行なうこととなった。本年度の奨励金受給者として採用されたものは、下記4名である。水野浩一（東南ア研修員）・矢野暢（法学部研修員）・坪内良博（文学部研修員）・高谷好一（工学部研究生）。

交流事業

1. シンポジウム

第1回国際シンポジウム「東南アジアにおける日本の将来」を1965年5月31日～6月2日、猪木正道教授（法学部）を運営委員長として、比叻山ホテルにおいて開催した。John H. Badgley (Miami Univ.), Harry J. Benda (Yale Univ.), Prachoom Choomchai (Chulalongkorn Univ.), V. P. Dutt (Indian School of International Studies), Herbert Feith (Monash Univ., Australia), Hla Myint (Oxford Univ.), Paul Langer, Guy



東南アジアにおける水資源利用にかんする
シンポジウム。 (1965年9月)

J. Pauker (RAND Corporation), Josefa M. Saniel (Univ. of the Philippines), David Wurfel (Univ. of Missouri) の10人の外人学者を招聘し、日本側からは衛藤藩吉 (東大)・福地崇生 (国際キリスト教大学)・石川滋 (一橋大)・神谷不二 (大阪市大)・福島徳寿郎・猪木正道・岩村忍・鎌倉昇・高坂正堯・香西茂・本岡武 (京大) の11名が参加した。

第2回国内シンポジウム「東南アジアにおける水資源の利用」を1965年9月17～19日、比叻山ホテルにおいて、農林省・海外技術協力事業団と共催。富士岡義一教授 (農学部) が組織委員長となり、61名の参加のもとに現地調査にもとづく20名の報告があった。

2. 講演会

第1回学内講演会を1965年5月29日、ついで第1回公開講演会を6月3日に大阪市の関電ホールにおいて、それぞれ開催した。

3. 客員教授の招聘

ビルマ政治を専攻とする Prof. John H. Badgley (Miami Univ.) を1964年9月から1965年6月にかけて招聘、東南アジア政治についての講義を法学部においてもった。

4. 学外専門家の招聘

つぎの諸専門家を招き、研究例会で講演を願い、ディスカッションの機会をえた。
Dean Kasem Udyanin (Faculty of Political Science, Chulalongkorn Univ.)
Director Kurt L. London (Institute for Sino-Soviet Studies, The George Washington Univ.)

喜多村浩博士 (ECAFE 経済計画分析部長)

岸幸一専門研究員 (アジア経済研究所)

なお、この1年間の外国人専門家の当センターへの来訪は、合計35名にのぼる。

5. 東南アジア研究センターからの海外学会出席

岩村所長は1965年3～4月に HRAF 理事会とアジア学会出席のため渡米、あわせて関係諸大学を訪問した。本岡教授は1965年6月に東南アジア研究センターを代表してフィリピン大学政治学科50周年式典に参列、11月にはバンコクでのチュラロンコン大学主催のアジア研究セミナー、クアラルンプールでのマレーシア資料収集会議、11～12月バンコクにおける熱帯東南アジアの自然資源保護会議に出席した。



藤をつみこむジャクン族。
(マラヤ・エンダウ川)

図書資料整備事業

1. HRAF 室

1年近くかかった約250万枚のカードからなる Human Relation Area Files (人間関係地域資料集)の整理もおわり、1965年7月1日に京都大学附属図書館に HRAF 室を開設、利用規定も作成して、一般公開のはこびにいたった。

2. 資料室

東南アジア研究センターのなかに資料室が設けられ、東南アジア関係の図書・雑誌・地図・政府刊行物などの収集整理が開始された。

出版事業

東南アジア研究計画のしめくりはいうまでもなく研究成果の出版にある。

1. Reports on Research in Southeast Asia

センターとして最も重要な英文の調査研究報告書であるが、Social Science Series と Natural Science Series とにわかれる。1966年3月に、Natural Science Series の No. 1 として、佐藤孝教授(兵庫農科大学)の *Field Crops in Thailand* の出版をみるにいたった。

2. Symposium Series

国内シンポジウムの報告は「東南アジア研究」特集号をもってあてられたが、その英文報告が東南アジア諸国で強く要請せられたため、英文としてプロシーディングを刊行することとなり、1966年3月に、まず No. 1 *Rice Culture in Malaya* が発刊された。

3. 季刊「東南アジア研究」

季刊誌「東南アジア研究」は、1965年度第3巻1～5号が刊行され、そのうち第4号は「東南アジアにおける水資源利用」のシンポジウムの特集号にあてられた。

4. 年刊「東南アジア研究センター所報」および

Bulletin of the Center for Southeast Asian Studies

日英両文で出版される東南アジア研究センターの年次報告は、1965年度には、第2号 1964/65 が公刊され、1964年度の事業報告と1965年度の事業計画が掲載された。

5. 東南アジア研究双書

不定期刊の邦文研究報告として本双書を発行することとし、第1巻は棚瀬襄爾博士の遺稿「世界観念の原始形態」があてられ、年度をこえて1966年4月にできあがった。

タイとマラヤの稲作



▲ 水牛による代かき作業。(マラヤ)

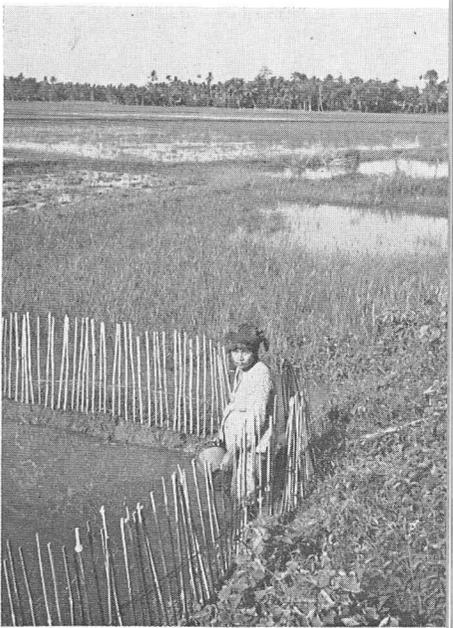


▲ 水牛のくびきとすき。(マラヤ)

▼ 牛による水田の均平作業。(タイ)



▼ バケツで苗代の水深を調節する。(マラヤ)



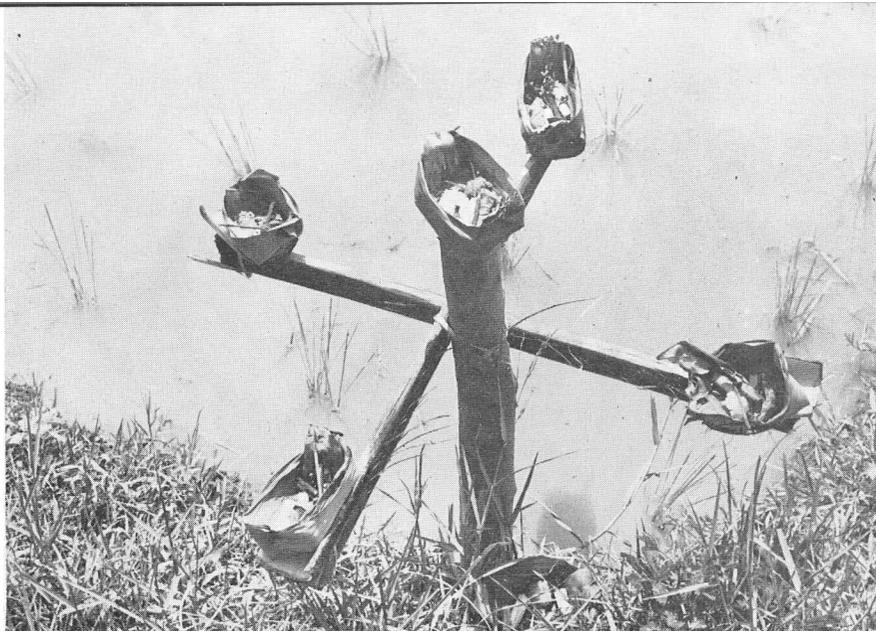
田植のまえに苗の葉先を
きりおとす。(タイ) ▶



- (左) 稲作試験場での正条植。(タイ)
- (中) ククカンピンと呼ばれる移植道具。(マラヤ)
- (右) 作土が固いので棒で穴をあけてうる。(タイ北部)



田植時における精霊に対する儀礼。(タイ北部)



← 稲刈。地上 60~70 cm 位で刈り取る。(タイ)

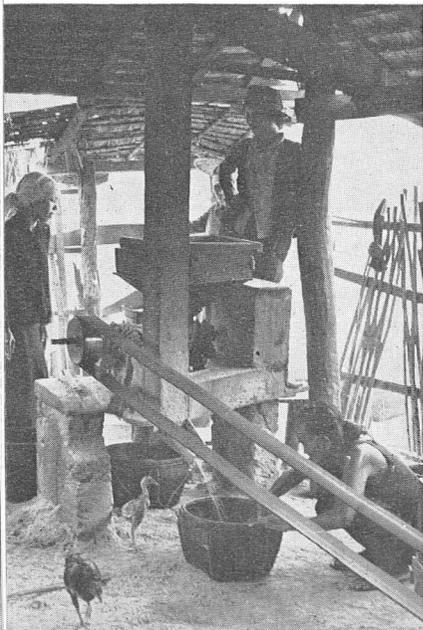
刈りとった稲を運ぶ道具。(タイ北部)





▲
大きなざるの中に脱穀し、うちわで
風選する。
(タイ北部)

共同のもみすり場。(タイ)



穀倉のもみ米をとり出し精米所
へ運ぶ。
(マラヤ)



1966年度事業の展望



東南アジア研究第1期5カ年計画は1966年4月より第4年度にはいる。現地調査研究はなおつづけられるが、本年度からは、これまでの現地調査のとりまとめと、その成果の出版にしたいに重点が移される。ここに1966年度の事業計画を展望しよう。

調査研究事業

I 現地調査

第1期5カ年計画としての社会科学部門の現地調査は、第3年度をもってほぼ終了し、スタートの1年おくれた自然科学部門は本年度を現地調査の最終年度とする。

A 社会科学部門

1. ビルマ・タイ地域調査

村落調査のため東北タイに定着中の水野研修員は7月末まで現地に滞在し、調査を終了する。カレン族を研究中の飯島助手は7月末の現地調査終了後、カレン族文献の最も整備されているロンドンの旧インド省図書館、ワシントンの国会図書館をはじめ欧米諸国で文献的研究をすすめる、11月末帰国の予定。

ビルマ・タイ地域調査の一環として、石井米雄助教授（東南ア研）が、5月から年度末まで、バンコク連絡事務所の責任者となるとともに、タイ国における農奴制（Phrai）と奴隷制（That）の崩壊過程について文献研究とともにメナム平原での現地調査をすすめる。

2. マレーシア・インドネシア地域調査

アロールジャングスの調査は前年度終了した。エンダウの非回教徒部落を調査していた前田大学院学生は、1カ月のばして本年度の4月末まで調査を行なった。

3. 東南アジアの政治構造と法律にかんする研究

大阪市大神谷教授は前年度から現地調査をすすめており、本年度6月までインドネシアに滞在する。溜池良夫教授・川又良世助教授（法学部）は、タイ・マレーシア・フィリピン・インドネシアに赴き、これら諸国の法律の比較研究のための資料を収集する。これをもって、東南アジア諸国の法律にかんする現地研究が開始される。



糸をつむぐアカ族の少女。(タイ北部)

B 自然科学部門

1. 医薬班

(1) 東南アジアにおける精神障害にかんする研究

笠原嘉助手（医学部）は、11月にタイにおいて精神障害者の調査を行なう。これは、わが国医学にとって未開拓の分野といえよう。

(2) 東南アジアにおける口腔疾患調査

小野尊睦助教授は佐藤匠助手（医学部）とともに、昨年度の美濃口教授・天野助手の研究につづいて、飲料水中の弗素の歯牙におよぼす影響を、8～10月にかけタイのほか、インド・セイロンで調査する。

(3) 東南アジアにおける呼吸器疾患調査

前川暢夫助教授（結核研究所）が8月に、主としてカンボジアにおいて肺結核化学療法における初回耐性例の分布状況について、佐川弥之助講師（結核研究所）は12月にタイにおける肺機能低下例について、それぞれ予備調査を行なう。

(4) 東南アジアにおける生薬生産状況の予察

タイにおける生薬の研究は、1963年度木村康一教授によってはじめられた。木村教授定年退官後これをひきついだ木島正夫教授（薬学部）は、11月にタイ・ホンコンで、生薬生産状況の予察を行ない、東南アジアで重要視されている生薬研究計画をたてる。

2. 地学班

(1) マレーシアにおける非鉄金属の製錬の調査

1964年度に非鉄金属製錬の研究のためマレーシアに赴いた森山徐一郎教授は、本年度も10月に再び現地へ行き、主としてスズの製錬を研究する。

(2) 東南アジアにおける火山性地すべりの予察

山口真一教授（防災研究所）は東南アジアの火山性地すべりの研究のための予察として、7月にフィリピンとインドネシアとを訪れる。

(3) メナム沖積平原の形成過程にかんする研究

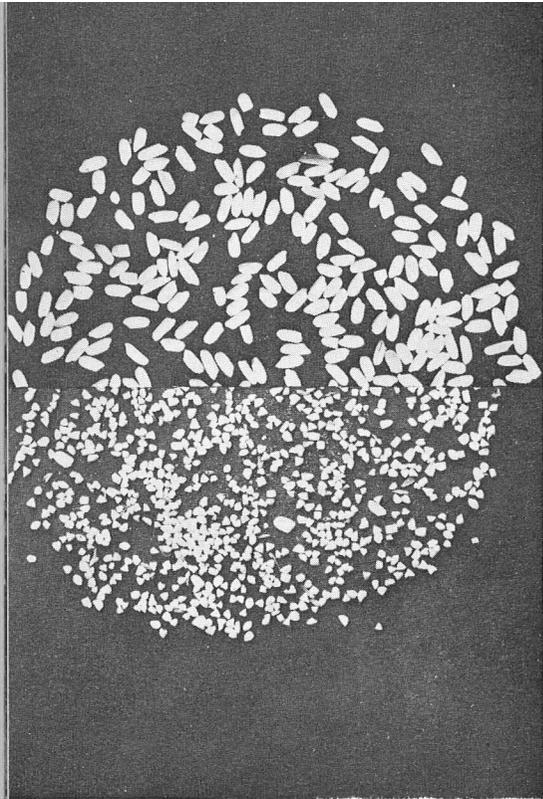
メナム沖積平原の形成過程にかんする地質学的研究は、メナムデルタの開発のための基礎となるものである。高谷好一研究生（工学部）は8月より翌年5月にかけて、チュラロンコン大学を根拠として現地においてデータを収集し、また実地調査を行なう。



祝宴の料理を運ぶ女達。（タイ南部）

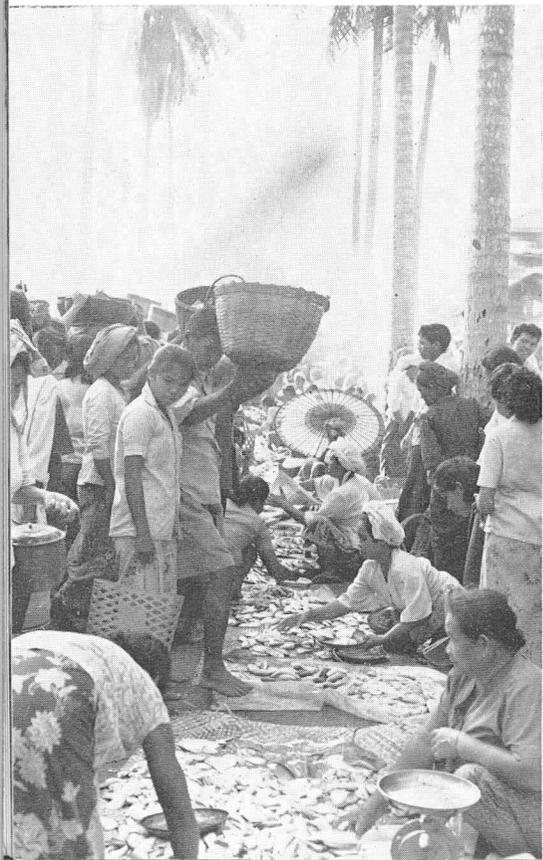


闘牛。村人のたのしみの一つ。（タイ南部）



チェンマイで市販されている良質米と碎米。
値段は 1/ あたり約30円と約20円。(タイ)

南タイの魚市場。



3. 農業生産班

(1) 熱帯水田土壌の調査研究

川口教授・久馬助手の両名は11月下旬より明年2月にわたり、東パキスタン・カンボジアの水田土壌の調査を行なう。

松尾嘉郎助教授(農学部)は8月より9月にかけてタイ・マラヤ・カンボジアの水田について湛水期における土層分化の様相を精査する。

服部共生助教授(京都府大農学部)は、前年度に渡部助教授により水稻の生育相・収量構成因子の解析が詳細になされた北タイの水田について、同助教授の案内をえて、立地土壌学的に精密に調査する。

(2) 東南アジアにおける水稻の植物栄養学的研究

福井大学院学生は昨年度にひきつづき、バンケンンのタイ米穀局技術部試験場に実験室をもち、6月より明年1月にかけて、水田における窒素の天然供給、チャオピアデルタにおける水稻の生育相などの研究をつづける。

高橋英一教授(農学部)はタイ・マラヤ・カンボジアの水稻についてアミノ酸代謝を中心とした研究と福井大学院学生の現地における指導とを行なう。

(3) 東南アジアにおける水稻病害にかんする研究

赤井教授は昨年度タイ・マラヤ・フィリピンの水稻について出穂前の病害を調査したが、今年度は同じ地域を対象とし、11月を中心とした出穂後の調査をすすめる。

(4) 東南アジアの農業水利開発にかんする研究

富士岡教授は、海田能宏助手(農学部)をとめない、12月より明年1月にわたりタイ・マラヤにおいて農業水利開発方式、ならびに水田用水の合理的利用と末端配水組織にかんする研究に重点をおく。

(5) 東南アジアにおける家畜改良にかんする研究

昨年度予察をすませた西川教授は、佐々江洋太郎大学院学生(農学部)とともに、11月中旬現地において、マラヤにおける家畜改良の研究の基礎方針をたてる。佐々江大学院学生は、ひきつづき明年4月上旬まで滞在し、その方針にしたがって研究をすすめる。

(6) 東南アジアにおける木材の研究

貴島恒夫教授(木材研究所)は南方材利用の研究の一環として、9~10月、タイ・マレーシアの木材の生産・利用状況を調査する。

II 第2期計画のための予備調査

第2期5カ年計画には、現地ラボラトリー設置の検討をはじめとして多くの問題がある。そのため、約5名を現地に派遣し、実態調査・資料収集および各国政府機関との交渉をする。

III バンコク連絡事務所

昨年度にひきつづきバンコク連絡事務所を運営、石井助教授が本年度の責任者となる。

養成事業

1. 留学生

留学生として下記の3名を昨年末に選考した。7月ごろよりちくじ留学国に出発する。

法貴 誠 大学院学生(農学部) 農業機械学専攻 国際稲作研究所(フィリピン)
野口 英雄 大学院学生(工学部) 建築学専攻 バンドン工科大学(インドネシア)
阪本 恭章 助手(東京外大AA研) クメール語専攻 カンボジア

2. 奨励金受給者

1966年度研究奨励学生として次の3名が採用された。

水野浩一(東南ア研研修員)・坪内良博(文学部研修員)・高谷好一(工学部研究生)

交流事業

1. シンポジウム

1966年10月1～2日に、第3回国内シンポジウム「熱帯医学」を厚生省ならびに海外技術協力事業団と共催する。

2. 外国人専門家の短期招聘

本年度は、Prof. F. Trager (New York Univ.), Mrs. Boonhtom Dhamcharee (National Research Council, Thailand) ほか1名の専門家を短期招聘する予定である。

3. 東南アジア研究センターから専門家のアメリカへの派遣

本年度も例年どおり、HRAF 理事会に岩村所長を派遣することとした。1966年3～4月に渡米。岩村所長は理事会出席後、関係機関や大学を訪問して帰国した。

図書資料整備事業

前年度にひきつづき、HRAF 室の整備と資料室の充実をはかる。

出版事業

出版計画としてわれわれが最も重点をおく Reports on Research in Southeast Asia の本格的な出版が、本年すすめられる。現在のところ約7冊を計画する。Symposium Series として *Japan's Future in Southeast Asia* と *Water Utilization in Southeast Asia* の2冊が予定されている。季刊誌「東南アジア研究」は第4巻の第1～5号が刊行され、そのうち、第4号は熱帯医学シンポジウムの特集号にあてられる。

お わ り に

東南アジア研究計画の過去3カ年の経験から、いかに学術研究の未開拓のフィールドが多いか、また、学術研究がいかにこの地域の発展のため重要であるかを痛感する。東南アジアの総合的研究をいっそう発展させるべきである。

それには研究の基礎条件を整備してゆかねばならない。さいわいに1965年度に東南アジア研究センターは官制化され、1部門が設けられたが、研究課題の多様性からみて、東南アジア研究をすすめてゆくには、5部門1資料室にまで拡充されることが切望される。第1期5カ年計画には、フォード財団の研究資金のほか、わが国財界の寄付金とかなりの国費をえた。第1期計画の成果の公刊をとおして、これら研究資金を拠出していただいた方々に酬いたい。研究資金の確保は公刊される研究成果のいかにあると信ずる。

第1期計画の第4、5年度には、これまでの調査研究のとりまとめに重点をおく。他方、過去の経験と実績とについて十分に検討反省し、第2期5カ年計画の樹立につとめたい。現在、タイとマレーシアにおける integrated area studies, インドネシア・カンボジア・フィリピンにおける preparatory project を構想している。

東南アジア研究センター既刊行物リスト

1966年6月30日現在

- I 季刊「東南アジア研究」(1963年6月発刊)
第1巻第1号～第4巻第1号(通巻14号)
- II 年刊「東南アジア研究センター所報」(1964年6月発刊)
" *Bulletin of the Center for Southeast Asian Studies* (1964年10月発刊)
No.1 (1963/64)～No.3 (1965/66)
- III Reports on Research in Southeast Asia (1966年3月発刊)
Natural Science Series No.1 Takashi Sato, *Field Crops in Thailand*, 1966.
- IV Symposium Series (1966年3月発刊)
No.1 *Rice Culture in Malaya*, 1966.
No.2 *Japan's Future in Southeast Asia*, 1966.
- V 東南アジア研究双書(1966年4月発刊)
第1巻 棚瀬襄爾著「他界観念の原始形態」, 1966.



マラヤにおける結納の品々。手前の皿の中は紙幣を折った結納金。▶

東南アジア研究センター研究担当教官名簿

1966. 6. 30 現在

所 属	職 名	氏 名	研 究 題 目	
東南アジア研究センター	所長(兼)	岩 村 忍	東南アジアの社会	
	教授	農博 岡 武雄	東南アジア諸国の農業開発	
	助教授	本石 米	タイ国近代史	
	助手	飯井 島内 良	タイ国の山地民社会	
	研修員	坪水 野 浩	マラヤ農村の社会構造	
	研究生	高 谷 好 一	タイ国東北部の村落社会の変動	
		京理大博 高 谷 好 一	メナムデルタの発達史	
	文 学 部	教授	文博 泉井 久之 助	マライ・ポリネシア諸語の比較言語学的研究
		教授	文博 織田 武義	東南アジアにおける村落
		教授	文博 池田 義竜	東南アジアにおける家族と村落
助教授		文博 西田 竜雄	東南アジアの言語	
教育学部	教授	法博 相池 良 惟 一	東南アジアの近代化と教育の役割	
	教授	文博 佐藤 幸 治	同 上	
	教授	文博 藤田 幸 治	東南アジアにおける禅法の比較研究	
	助教授	小田 倉 親 兼 二	東南アジアにおける教育内容	
	助教授	小森 栗 一 男	東南アジアにおける読書の資源と機会	
	助教授	栗 本 一 男	東南アジアの近代化と教育の役割	
	助手	栗 本 一 男	同 上	
	法 学 部	教授	法博 中田 淳 一郎	東南アジア諸国の比較法的研究
		教授	法博 畑 茂 二 郎	東南アジアにおける国際関係
		教授	法博 猪木 村 正 道	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程
教授		法博 磯 平 安 治	東南アジア諸国の比較法的研究	
教授		法博 溜 池 良 夫	同 上	
教授		法博 福 島 德 寿 郎	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程	
教授		法博 道 田 吉 太 郎	東南アジア諸国の比較法的研究	
教授		法博 勝 田 吉 太 郎	東南アジア諸国の政治思想	
教授		京理大博 上 山 安 敏	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程	
教授		京理大博 上 山 安 敏	東南アジア諸国の比較法的研究	
経済学部	助教授	清 園 永 敬 次	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程	
	助教授	田 部 田 節 夫	同 上	
	助教授	高 村 正 義	東南アジア諸国の比較法的研究	
	助教授	堀 江 保 蔵	東南アジアにおける国際関係	
	教授	経博 鎌 倉 野 博	東南アジア諸国の比較法的研究	
	助教授	経博 芦 田 讓 治	東南アジアの経済的近代化要因	
	助教授	理博 久 保 寺 章	東南アジア経済近代化の阻害条件	
	教授	理博 久 保 寺 章	東南アジアの植物	
	教授	理博 小 沢 泉 夫	東南アジアにおける ¹⁸ O-炭酸カルシウムの分布	
	助教授	理博 小 吉 田 川 基 三 二	東南アジアの火山および地震	
理学部	助教授	理博 小 吉 田 川 基 三 二	東南アジアの地震と地殻変動	
	助教授	理博 小 吉 田 川 基 三 二	東南アジアにおける陸水	
	助手	京理大博 岩 槻 邦 男	東南アジアのシダ植物	
	医学部	教授	医博 浅 山 亮 二	同 上
		教授	医博 濃 口 玄 仁	東南アジアにおける失明の原因とその対策
		教授	医博 村 上 占 貞	東南アジアにおける飲料水中弗素量と斑状歯発症との関係
		教授	医博 西 岡 誠 太 郎	東南アジアにおける民族精神医学的研究
		助教授	医博 岡 田 誠 太 郎	東南アジアにおける小児らいの研究
		助教授	医博 小 野 尊 睦	同 上
		助教授	医博 小 野 尊 睦	東南アジアの慢性弗素中毒症
助教授		医博 藤 原 清 嘉	タイ国における精神障害者の精神医学的調査	
助手		京理大博 佐 藤 匠	同 上	
助手		京理大博 佐 藤 匠	東南アジアの慢性弗素中毒症	
薬学部	助手	医博 天 野 義 彦	同 上	
	教授	薬博 井 上 博 之 夫	東南アジアにおける医薬資源としての植物	
	教授	薬博 島 正 清	東南アジアにおける薬用植物と生薬の調査	
	助教授	薬博 秦 清 之 郎	同 上	
工学部	教授	工博 松 尾 新 一 郎	タイ国における土質と地下水	
	教授	理博 本 住 永 三 郎	東南アジアにおける酸性火成岩にともなう鉱床	
	教授	工博 吉 向 山 滋 郎	東南アジアにおける地下資源の探査	
	教授	工博 井 山 一 郎	東南アジアにおける鉱産資源の選鉱	
	助教授	工博 森 鹿 恒 茂	東南アジアの非鉄金属・希有金属資源と製錬 東南アジアにおける酸性火成岩にともなう鉱床	

所 属	職 名	氏 名	研 究 題 目
工 学 部	助教授	工博 谷口 敬一郎	東南アジアにおける地下資源の探査
	講師	理博 河野 伊一郎	タイ国における土質・地下水
農 学 部	講師	工博 上江 恒爾	東南アジアにおける酸性火成岩にともなう鉱床
	教授	農博 坂 章	東南アジアにおける地下資源の探査
	教授	農博 谷川 次浩	東南アジアにおける飼料中の微量元素含量の分布
	教授	農博 西川 義正	東南アジアにおける稲作
	教授	農博 西川 義正	東南アジア地域における家畜の生産性
	教授	農博 山口 井綱三	東南アジアの自然環境
	教授	農博 山口 井綱三	東南アジアの水田土壌
	教授	農博 赤井 重恭	東南アジアにおける稲作病害
	教授	農博 赤井 重恭	東南アジアにおける農業水利構造物
	教授	農博 岡 義一	東南アジアにおける土地水資源と農業開発 タイ国に適應せる農業簿記様式
教 養 部	教授	Ph.D. ウィスコンシン大学 貝 原 基 介	簿記調査にもとづくタイ国の農業経営
	教授	農博 高 橋 英 一 夫	東南アジアの水稲の栄養生理
	助教授	農博 堤 嘉 郎	東南アジアの自然環境
	助教授	農博 松 尾 中 正	東南アジアの水田土壌
	助教授	農博 南 菊 地 泰 次	東南アジアにおけるコムギの地理的分布
	助教授	農博 南 菊 地 泰 次	東南アジアの広域農業水利計画
	助教授	農博 阿 部 谷 亮 一	タイ国に適應せる農業簿記様式
	助教授	農博 阿 部 谷 亮 一	簿記調査にもとづくタイ国の農業経営
	助 手	大博 京農 久 馬 一 剛	東南アジアの水田土壌
	助 手	大博 京農 堀 川 幸 也	同 上
	助 手	大博 京農 村 北 河 津 一 儀	東南アジアにおける農地開発計画
	助 手	大博 京農 小 林 達 治	魚毒性成分含有植物の探索とその成分の化学的研究
	助 手	大博 京農 菅 野 和 誠	水田土壌中の窒素固定性微生物の探索
	助 手	大博 京農 菅 野 和 誠	熱帯林の生態学的研究
	化学研究所	助教授	農博 野 柴 田 実 男
教授		理博 西 村 陸 幸 男	東南アジアの稲米儀礼
教授		理博 西 村 陸 幸 男	東南アジアの経済地理的研究
教授		理博 大 吉 井 三 実	東南アジアにおける外国語教育
教授		農博 平 野 孝 直	東南アジアのファウナ
教授		農博 山 下 米 介	陸水産藻類の植物分類学的植物地理学的研究
教授		農博 山 下 米 介	南方栽培植物の特性とその導入にかんする研究
助教授		農博 久 安 藤 昭 一	南方植物の発生理
助教授		農博 久 安 藤 昭 一	東南アジアにおける外国語教育
助教授		農博 尾 崎 雄 二	東南アジアにおける中国語方言
人文科学研究所	助 手	理博 横 田 澄 司	自己評価と行動型式にかんする研究
	教授	理博 横 田 澄 司	東南アジアにおけるゴム加工
結核研究所	教授	平 岡 武 夫	東南アジアの仏教
	助教授	文博 日 比 野 丈 夫	マラヤの華僑
木材研究所	助教授	文博 日 比 野 丈 夫	マラヤの村落
	教授	医博 吉 田 光 邦	東南アジアにおける結核の現状調査と結核外科指導
	教授	医博 長 石 忠 益	東南アジアにおける結核の疫学と化学療法
食糧科学研究所	教授	医博 内 寺 松 一 孝	東南アジアにおける結核の現状調査と結核外科指導
	教授	医博 前 川 暢 夫	東南アジアにおける結核の疫学と化学療法
	教授	農博 貴 島 恒 夫	南方材の調査
防災研究所	助教授	農博 尾 弘 一 郎	同 上
	教授	農博 西 本 孝 一	同 上
	教授	農博 葛 西 善 三 郎	東南アジアにおける食糧資源の開発と利用
	教授	工博 石 崎 發 雄	東南アジアにおける構造物の暴風災害
	教授	理博 山 口 林 真 一	東南アジアにおける地盤地質と地すべり地の分布型
	教授	工博 山 若 石 原 安 雄	東南アジアにおける構造物の風害と震害
	教授	工博 石 原 安 雄	東南アジアにおける水災害
	教授	工博 芦 屋 和 男	同 上
	教授	農博 南 井 良 一	同 上
	助教授	理博 南 井 良 一	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査
助教授	理博 樋 口 明 博	東南アジアにおける水災害	
助教授	理博 樋 口 明 博	同 上	
助教授	理博 光 田 雄 次	東南アジアにおける構造物の暴風災害	
助教授	理博 光 田 雄 次	東南アジアにおける地盤地質と地すべり地の分布型	
助教授	Ph. D. ブラウン大学 野 中 泰 二 郎	東南アジアにおける構造物の風害と震害	

所 属	職 名	氏 名	研 究 題 目
防災研究所	助教授	長尾正志	東南アジアにおける水災害
	助教授	井上豊	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査
	助手	桂順	東南アジアにおける構造物の暴風災害
	助手	鈴木有	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査
	助手	松井千	東南アジアにおける構造物の風害と震害
ウイルス研究所	教授	医博 東昇	東南アジアにおける熱帯ウイルス病
	教授	医博 松木清一	狂犬病街上海ウイルスの蒐集
	助教授	医博 市田文弘	東南アジアにおける流行性肝炎

学外研究参加者名簿

(ABC順)

所 属	職 名	氏 名	研 究 題 目
東海大学文学部(京大名誉教授)	文 博	足利惇氏	東南アジアにおけるインド的要素
九州大学教育学部	助教授	綾部恒雄	東南アジアにおける教育文化の比較研究
関西大学文学部	教 授	藤本勝次	マラヤのイスラム社会
京都女子大学文学部	教 授	藤原利一郎	東南アジアにおける華僑発達史
花園大学文学部	教 授	藤吉慈海	東南アジアの仏教教団
京都府立大学農学部	助教授	農博 服部共生	東南アジアの水田土壌の鉱物学的研究
塚山大学教育学部	助教授	伊原吉之助	東南アジア近代化の比較史的研究
東大医学部歯科	助 手	今立源太良	東南アジアにおける森林土壌動物
大阪大学教育学部	教 授	石堂 豊	東南アジアにおける社会教育と教育事情
大阪大学法学部	教 授	神谷不二	東南アジアとくにインドネシアにおける政軍関係
富山大学文学部	教 授	薬博 木村康一	東南アジアにおける薬用植物
奈良大学教育学部	講 師	京大 北川尚史	東南アジアの苔類
竜谷大学文学部	助教授	口羽益生	マラヤとインドネシアの社会構造
岡山大学農学部	教 授	農博 小林 純	東南アジアの河川の化学的研究
天理大学理学部	講 師	前田清茂	マラヤ村落における華僑
天理大学理学部	教 授	中村孝志	南方華僑史
大阪外国語大学	助 手	大野 徹	ビルマ系諸言語の記述的歴史的研究
東海大学文学部	助 手	酒井敏明	東南アジアの人文地理
兵庫農科大学	教 授	佐藤 孝	東南アジアにおける畑作の栽培学的研究
京都府立大学医学部	研究員	正垣幸男	東南アジアのフィラリア・マラリア・寄生蠕虫
山形大学教育学部	講 師	高木英明	東南アジアにおける教育制度
神戸大学教育学部	教 授	高木太郎	東南アジアにおける教育制度
東北薬科大学	教 授	薬博 高橋三雄	フィリピンとタイの薬用資源の化学的研究
アライシ協会	医務部長	医博 戸田圓二郎	タイ国におけるライの臨床的・病理学的調査研究
東京大学東洋文化研究所	講 師	築島謙三	マレー人村落の自治体制と人倫意識
京都産業大学	教 授	農博 上田弘一郎	東南アジアにおける竹林の生態学的研究
京都府立大学農学部	助教授	農博 渡部忠世	東南アジアにおける水稲栽培の作物学的研究
大阪市教育研究所	所 員	山口三郎	東南アジアの教育制度の比較研究
天相会	肺外科長	医博 山本利雄	東南アジアにおける肺・心臓外科の現状調査
大阪外国語大学	講 師	矢野 暢	タイ国南部の村落社会の変動

規 程

国立学校設置法施行規則（抄）

（東南アジア研究センター及びその所長）

第二十條の二 京都大学に、東南アジア地域に関する総合研究を推進するための組織として、東南アジア研究センターを置く。

2 東南アジア研究センターに所長を置き、教授をもって充てる。

京都大学東南アジア研究センター管理委員会規程

（昭和40年4月27日達示第8号制定）

第一條 京都大学に東南アジア研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

第二條 管理委員会は、東南アジア研究センター（以下「研究センター」という。）に関する次の各号にかかげる事項を審議する。

- 一 所長の選考および任期に関すること。
- 二 教官の人事に関すること。
- 三 規程、内規等の制定および改廃に関すること。
- 四 年次研究計画および予算に関すること。
- 五 その他研究センターの管理運営に関する重要事項

2 管理委員会は、研究センターの毎年度の研究報告および決算報告書を提出させるものとする。

第三條 管理委員会は、次の各号にかかげる委員で組織する。

- 一 学部長
- 二 教養部長
- 三 関係研究所長
- 四 研究センター所長

2 前項第三号の委員は、総長が委嘱する。

第四條 管理委員会に委員長および副委員長を置く。

2 委員長および副委員長は、委員の互選によって定める。

3 委員長および副委員長の任期は、2年とする。

第五條 管理委員会は、委員長が招集し、議長となる。

2 前項の招集は、年一回以上行なわなければならない。

3 2名以上の委員から審議事項を示して管理委員会の開催を求められたときは、委員長は、すみやかに管理委員会を招集しなければならない。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

第六條 議案は、前条第3項に定める場合を除き、委員長が管理委員会に付議する。

第七條 管理委員会は、委員の4分の3以上が出席しなければ開会することができない。

第八條 管理委員会の議事は、出席者の3分の2以上の多数で決する。

第九條 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者に出席を求め、意見を聞くことができる。

第十條 管理委員会の事務を処理するため幹事若干名を置き、総長が委嘱する。

第十一條 前各条に定めるもののほか、議事の運営その他の必要事項は、管理委員会が定める。

附則

1 この規程は、昭和40年4月27日から施行し、昭和40年4月1日から適用する。

2 京都大学東南アジア研究センター規程（昭和38年達示第1号）および京都大学東南アジア研究センター管理委員会規程（昭和38年達示第2号）は、廃止する。

東南アジア研究センター組織内規

第一條 この内規は、東南アジア研究センター（以下

「研究センター」という。）の内部組織について必要な事項を定める。

第二條 研究センターに運営委員会を置く。

2 運営委員会は、研究センターの業務の運営に関する事項を審議する。

3 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 所長
- 二 専任の教授
- 三 関係部局長から推せんされた教授各1名
- 四 研究担当教官のうちから所長が委嘱した者

4 前項第四号の委員の数は、同項第三号の委員の数の3分の1をこえてはならない。

5 第3項第3号および第4号の委員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

6 運営委員会は、所長が招集し、その議長となる。ただし、所長に事故があるときは、総務部主任たる委員が議長となる。

第三條 研究センターに総務部、人文・社会科学部および自然科学部を置く。

2 部の業務は、次の各号に定めるとおりとする。

- 一 総務部 研究交流計画、研究者養成計画の立案、実施および連絡調整ならびに研究資料の収集、整理および保管等に関すること。
- 二 人文・社会科学部 人文・社会科学的調査研究の立案、実施および連絡調整に関すること。
- 三 自然科学部 自然科学的調査研究の立案、実施および連絡調整に関すること。

第四條 部に主任および副主任を置く。

2 主任および副主任は、運営委員会の議を経て、委員のうちから所長が委嘱する。

3 主任は、部の業務を総括する。

4 副主任は、主任を補佐し、主任に事故があるときは、その職務を代行する。

第五條 人文・社会科学部および自然科学部にそれぞれの調査研究計画の遂行上必要な場合には、班を置く。

2 班はそれぞれの調査研究計画を立案し、実施する。

3 班の組織については、運営委員会の議を経て所長が定める。

第六條 調査研究計画の効率的な実施をはかるため、必要に応じて所長は、専任教官および研究担当教官による合同会議を開くものとする。

第七條 研究担当教官は、関係部局長の推せんのあつた者につき運営委員会において選考する。

第八條 所長は、運営委員会の議を経て他大学の教官等に研究協力を依頼することができる。

第九條 所長は、運営委員会の議を経て大学院学生等に調査研究の機会を与えることができる。

第十條 この内規の運用に関する細目については、運営委員会の議を経て所長が定める。

附則

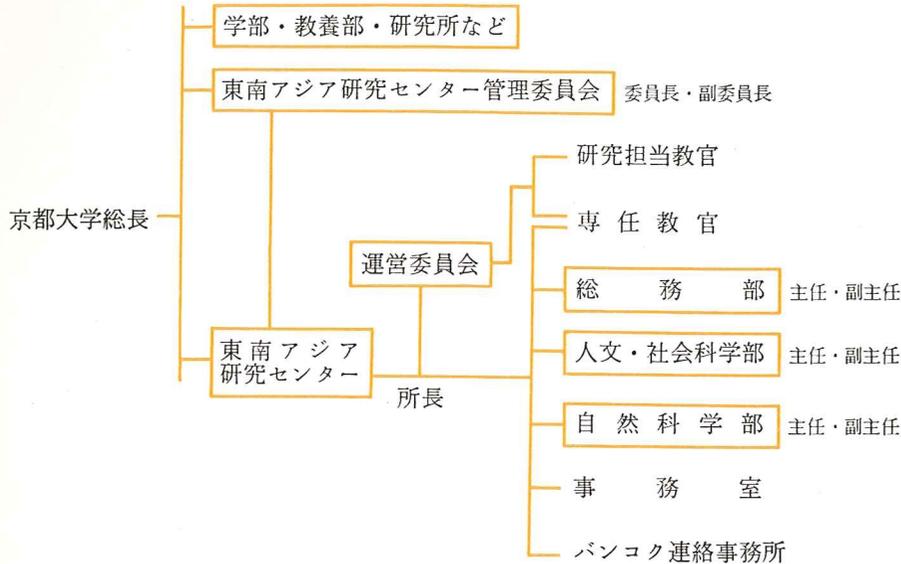
1 この内規は、昭和40年5月11日から施行し、昭和40年4月1日から適用する。

2 東南アジア研究センター組織運営内規（昭和38年6月4日制定）および東南アジア研究センター運営協議会内規（昭和38年6月4日制定）は、廃止する。

附則

この改正内規は、昭和41年5月24日から施行する。

**東南アジア研究センター
機 構 図**



東南アジア研究センター管理委員会

委員長	農学部	長	小林 章
副委員長	人文科学研究所	長	森 鹿三
委員	文学部	長	大山 定一
"	教育学部	長	鯨坂二夫
"	法学部	長	田畑茂二郎
"	経済学部	長	大橋隆憲
"	理学部	長	後藤良造
"	医学部	長	山田 肇
"	薬学部	長	上尾庄次郎
"	工学部	長	桜田 一郎
"	教養部	長	山下孝介
"	結核研究所	長	長石忠三
"	防災研究所	長	石原藤次郎
"	東南アジア研究センター	所長	岩村 忍
幹事	庶務部	長	内藤和美
"	経理部	長	西間木久郎

東南アジア研究センター運営委員会

所長	人文科学研究所教授	岩村 忍 (社会科学部主任)
委員	文学部教授	泉井久之助
"	教育学部教授	相良 惟一 (総務部副主任)
"	法学部教授	猪木 正道 (社会科学部副主任)
"	法学部教授	溜池 良夫
"	経済学部教授	堀江保蔵 (総務部主任)
"	理学部教授	芦田 譲治 (自然科学部主任)
"	医学部教授	美濃口 玄
"	医学部教授	藤原元典
"	医学部教授	西 占 貢
"	薬学部教授	木島正夫
"	工学部教授	滝本 清
"	農学部教授	四手井綱英 (自然科学部副主任)
"	農学部教授	川口桂三郎
"	教養部教授	吉井良三
"	結核研究所教授	内藤益一
"	防災研究所教授	山口真一
"	東南アジア研究センター教授	本岡 武

(1966年6月30日現在)

目 次

はじめに	1
1965年度事業の経過	2
調査研究事業	2
I 現地調査	2
A 社会科学部門	2
1 ビルマ・タイ地域調査	2
2 マレーシア・インドネシア地域調査	2
3 東南アジアの宗教	3
4 東南アジアの教育	3
5 東南アジアの政治構造	3
B 自然科学部門	4
1 生物班	4
2 医薬班	4
3 地学班	5
4 農業生産班	5
II 研究例会	8
III 調査研究計画のための予備調査	8
IV バンコク連絡事務所	8
養成事業	8
交流事業	8
図書資料整備事業	10
出版事業	10
1966年度事業の展望	15
調査研究事業	15
I 現地調査	15
A 社会科学部門	15
1 ビルマ・タイ地域調査	15
2 マレーシア・インドネシア地域調査	15
3 東南アジアの政治構造と法律	15
B 自然科学部門	17
1 医薬班	17
2 地学班	17
3 農業生産班	18
II 第2期計画のための予備調査	19
III バンコク連絡事務所	19
養成事業	19
交流事業	19
図書資料整備事業	19
出版事業	19
おわりに	20
東南アジア研究センター刊行物リスト	20
東南アジア研究センター研究担当教官名簿	21
東南アジア研究センター学外研究参加者名簿	23
東南アジア研究センターにかんする規程	24
東南アジア研究センター管理委員会名簿	表 III
東南アジア研究センター運営委員会名簿	表 III